母親の対乳児動作を含む母子コミュニケーションの発達の变化

野呂衣美¹・中野茂²(¹ 社会福祉法人横浜やまびこの里・² 北海道医療大学心理科学部)

キーワード: 対乳児動作, 母子相互作用, 笑い

Developmental change of the mother's infant directed actions and infant's reactions

Emi NORO¹, Shigeru NAKANO²(¹ Social Welfare Corporation Yokohama Yamabikonosato, Health Science University of Hokkaido., ²)

Key Words: infant directed action, mother-infant interaction, laugh,

目 的

大人が子どもとコミュニケーションを図る際、大人は子どもの能力に合わせて発話や動作といったコミュニケーション要素を様々に変化させている。このうち動作における修正は、対乳児動作 motionese (Brand, Baldwin and Ashburn, 2002) として知られている。対乳児動作の先行研究からは、モノを介した母子の相互交渉場面において母親が大人と関わる時と子どもと関わる時とで動きを変化させている (Brand et al., 2002) こと、18 か月の子どもと比べて 6 か月の子どもと関わる際に情動的な関わりを多く行う (Adamson & Bakeman, 1984) こと等が明らかにされている。本研究ではモノを介した母子の遊び場面における母親の対乳児動作の変化と乳児の反応の関係を明らかにするほか、4 か月と 7 か月でのコミュニケーションの縦断的变化についても明らかにする。

方 法

実験室において玩具を用いた母子の遊び場면을ビデオ録画し、分析した。乳児用の椅子を使い、母子は対面するように座る。母親は 2 種類の教示 (注視と笑い) に従い、用意された玩具を用いて子どもと遊ぶ。録画された映像から母親の対乳児動作 (繰返し (細)・繰返し (大)・不意・静止・その他) と、乳児の反応 (母親を見る・対象物の注視・微笑・発声・接触) を、1 秒を 1 単位として時間見本法により評定した。また、motion capture を用いて 1 秒毎の座標変化量を求め動きの大きさを 5 段階 (m1~m5) で評定した。対象は、ボランティアで協力者として応募してくれた母子 7 組 (4 か月と 7 か月の時に実施)。

結 果

Kruskal Wallis 検定を行い、4 か月と 7 か月の母親の対乳児動作と乳児の反応の生起頻度を比較した結果、注視条件では母親の対乳児動作の繰返し (大) ($\chi^2(1) = 3.239, p < .10$) に有意傾向と、不意 ($\chi^2(1) = 5.106, p < .05$) に有意差が見られ、乳児の反応では注視 ($\chi^2(1) = 4.897, p < .05$) に有意差が、接触 ($\chi^2(1) = 3.015, p < .10$) では有意な傾向が認められた。一方笑い条件では母親の対乳児動作の繰返し (細) ($\chi^2(1) = 5.770, p < .05$) と繰返し (大) ($\chi^2(1) = 4.693, p < .05$) に有意差、その他 ($\chi^2(1) = 2.908, p < .10$) に有意傾向が認められ、乳児の反応では微笑 ($\chi^2(1) = 2.943, p < .10$) に有意傾向と発声に ($\chi^2(1) = 4.313, p < .05$) に有意差が認められた。

母親の動きによって生じた乳児の笑い と母親の繰返し動作の関係を調べた結果、4 か月では動きによって生じた笑い と m1 ($r = -.240, p < .001$) に弱い負の相関が見られた。また動きによる笑いを独立変数、繰返し対乳児動作 (m1~m5) を従属変数として一元配置の分散分析を行った結果、動きによる笑い と繰返し動作に有意差があり ($F(4) = 4.967, p < .01$), m1 と m4, m1 と m5 の平均値がそれぞれ 5%水準で有

意であった。一方 7 か月では動きによる笑い と繰返し動作 (m1~m5) に有意な関係は認められず、一元配置の分散分析からも有意差は示されなかった。月齢比較に関しては、m1 ($\chi^2(1) = 16.4, p < .001$) m2 ($\chi^2(1) = 3.68, p < .10$) m3 ($\chi^2(1) = 6.64, p < .01$) の細かな動きに増加が認められた。これらの結果から 4 か月では m4 や m5 といった大きな動きが笑い と関係しているのに対して、7 か月では動きの大きさによる違いはなくなっていることが分かる。

Figure1. 繰返し対乳児動作と笑いの生起確率

考 察

注視条件において、4 か月では有意差は見られなかったものの 7 か月では母親の繰返し (細) のタイプの対乳児動作が多く用いられ、乳児も注視条件において多くの注視を示すという結果が得られた。一方笑い条件では、4 か月・7 か月と共通して繰返し (大) の対乳児動作タイプが多く用いられていることと、乳児の微笑・接触が多くなるという結果が得られた。このことは、母親が教示に従い、条件に合った対乳児動作タイプを選択して使っているという証拠であり、それと同時に乳児もまた母親の対乳児動作からその意図を読み取り適切に反応していることが分かった。

さらに、繰返し対乳児動作の大きさと笑いの生起確率の比較からは 4 か月では大きな動きによる直接的な刺激で乳児の笑いが引き出されていたのに対し、7 か月では直接的な刺激以外 (間接的な刺激) でも乳児が笑うようになるという結果が得られた。このことは、親が乳児の発達の变化に合わせて期待感を持たせて笑わせるなど関わり方を変化させているためと考えられる。

引用文献

- Bakeman, R., and Adamson, L., Coordinating attention to people and objects in mother infant and peer-infant interactions, *Child Development* 55 (1984), pp. 1278-1298.
- Brand, R. J., Baldwin, D. A., & Ashburn, L. A. (2002). Evidence for 'motionese': Modifications in mother's infant-directed action. *Developmental Science*, 5, 72-83.